



央州寺通信 十二月号



「人の為」

12月は私の祖父の誕生日、父の誕生日、そして母の命日のある月であります。祖父は80歳になるまでは「お釈迦さん(80歳)の歳までは...」、80歳を過ぎると「蓮如さん(85歳)の歳までは...」、そして85歳を過ぎると「ご開山(90歳)の歳までは...」と頑張ってきた。残念ながらご開山親鸞聖人の年齢までは届きませんでしたが、往生された姿は穏やかなものでした。祖父が亡くなったのは千葉県松戸市の叔父のお寺でした。

私の父は次男坊で、本来ならば島根のお寺は叔父が継ぐはずでした。しかし、叔父が千葉県松戸市で都市開教を始めたので、父が島根のお寺を継ぐことになったのです。父は早稲田大学教育学部を出て、大日本印刷への就職も決まっていたそうですが、親しい友人が自死したこともあり、人生について考えるようになり、僧侶の道を歩むことに決めたそうです。

私の実家のお寺は晴雲山高林寺と言います。全く同じ名前でも都市開教を始めた叔父は、最初は公民館で法話会のようなものを持ち、そこから徐々にご門徒の数が増えて行ったそうです。今ではかなり大きなお寺になっており、過疎化によって先行きの見えない島根の高林寺と比べると対照的であります。

このような状態ですので、父は私に島根の自坊の跡継ぎとなることを強要せず、開教使として海外での布教することを許してくれました。叔父には二人の子供がいて、将来的にはいどころが島根の自坊の面倒も見てくれるということになったようです。ですから、私は生涯海外での布教をすることが生きていく術、家族を養っていく術となるわけですが、出来れば一つの土地に腰を据えて、叔父がかつてしたように公民館レベルの小さな法話会でもいいですから、徐々に浄土真宗のみ教を伝えていく活動をしていければと思いま

す。

さて、このように家族の話からお話をはじめさせていただいたのも、私のいとこの話を少しさせていただきたいと思ったからです。叔父には私より年上の智之とさおりという二人の子供がいて、共に僧侶であり、親でもあります。さおりは漫画を描くのが得意で、漫画を使った伝道というものをしておりました。ちなみに、母方の親族もほぼ皆僧侶なのですが、母方の祖父は芸術肌の人で、絵が大変得意であったのと、手先が器用でありました。私の小さい頃には人形劇をお寺でやり、子供達を喜ばせていたのを覚えています。

このさおりの作り出したキャラクターに「アミダーマン」というキャラクターがいます。「アミダーマン」の話は叔父のお寺のホームページからも見る事が出来ます。

http://www.pluto.dti.ne.jp/~kennyko/amidaman/amidaman_top.htm

この「アミダーマン」の話の中で好きな話というか、はっとさせられた話があります。ある女の子が感謝されることに喜びを覚え、人の為に何かをしてあげるといってお話なのですが、何かをしてあげて感謝されないことが原因となり、怪獣（妖怪）になってしまうというお話です。「人の為」といいながらも、心の奥底では「感謝されたい」という気持ちがあるために、「なんで感謝してくれないの！」という心が起こるわけです。アミダーマンでは最後に「人の為と書いて『偽』と読む」と締めていましたが、なるほどなーと妙に納得させられました。

私自身、この「人の為」という偽の心、見返りを求める心がしょっちゅう起こっているような気がします。やはり、「ありがとう」と言われれば嬉しいですし、いわれなければ「感謝してくれない」と思ってしまいます。このような煩惱にさいなまれている私である事に気づかずに、愚痴をこぼしているのが真の私であるわけですが、阿弥陀如来の光明はこの私の真の姿を照らしてくださり、本来あるべき姿というものを示してくださいます。

大乘仏教では「布施」という修行を六波羅蜜の一番に据えています。が、「布施」というのは「三輪清浄の

布施」でなければならないと言われます。「三輪」とは布施する人の心持ち、布施を受ける側の心持ち、そして布施される物であり、それらが「清浄」であるというのは見返りを求めない、してもらって当たり前だと思わない、あげる物に対して執着しないことでもあります。これは見返りを求める心を持っている凡夫にはとても難しい行であります、あるべき姿を知ると、日々のあり方にも影響が出てくるのではないのでしょうか。

「人の為」に何かをするというのは素晴らしいことです。ただ、そこに見返りを求める心がないでしょうか？また、してもらって当たり前だと思っていないでしょうか？そう考えると、この年末のお礼やお歳暮をいただく季節になるといかに私が見返りを求めてきた一年であったかと考えさせられます。また、それと同時に、この一年も阿弥陀如来によって照らされてきた一年であったなと気づかせていただきました。

皆さんはどのような一年でありましたでしょうか？どうかお体にはお気をつけて、来年もまたお会い出来るのを楽しみにしております。よいお年を！

合掌

菅原祐軌

央州寺駐在開教使